

## 『保護犬のススメ』



保護犬のハンター（ミニチュアピンシャー・♂）を迎えてから丸2年が経ちました。

実は私が犬を飼い始めたのは46才と、とても遅く、きっかけは10年続けた不妊治療に区切りをつけたことでした。

子供に恵まれなかったカップルが犬を飼い始めるというのは珍しい話ではありませんが、私は子供の頃から動物が苦手で、犬は自分の選択肢にありませんでした。

それがたまたま「ペット可」のマンションに引っ越したタイミングで、パートナーが私に無許可で某ブリーダーさんに注文してしまいました。果たして、ミニピンとの出会いはハンターで3匹目。我が家にとって、初めての“男の子”であり、保護犬です。「動物愛護委員会」の活動で様々な現実を知らなければ出会うこ

とがなかった子でした。

ハンターと私が出会う間には多くの皆さんの御尽力と多くの奇跡があります。

まずは東京某市の路上をミニピン 3 匹だけで彷徨っていたところを保護してくださった女性です。たまたま犬の散歩中だったそうで犬に慣れた方だったとはいえ、すばしっこいミニピンを 3 匹まとめて近所の工場内まで追い込み、工員の方と協力しながら保護センターに連れて行ってくださったと聞きました。

その後、2 匹を動物保護団体「the VOICE」さんが、残る 1 匹を別の団体さんが引き出してくれて、無事 3 匹共、家族として迎えられました。

HP でミニピンの保護犬を検索していて繋がった「the VOICE」さんの女性代表が、我ら動物愛護委員会の委員長・湯川れい子さんのお知り合いという偶然にも後押しされて、譲渡会から正式譲渡までは、とてもスムーズに進むことができました。

さらに、ハンターの兄らしき一騎くんを迎えたママが中心となり、3 家族は結ばれ、時折、愛犬の近況や近影を交換しあっています。

そのママから聞いたのですが、最初にハンターたちを保護してくださった女性は、遠路はるばる各譲渡会まで足を運んでくださり、彼らが無事新しい家族に迎えられることを見届け、とても喜んでくださっていたそうです。

ハンターが当初どういう状況で飼われていたのか、なぜ寒空の下に放たれたの

か、そしてもちろん年齢もハッキリしたことはわからないのですが、「もう絶対、不幸な目には遭わせない」という信念の元、愛情を注ぎまくる日々。その思い以上に応えてくれるハンターは、不思議なもので、“初めての犬”ピン（享年11）と顔がソックリになりました。

「保護犬は、みんないい子」とは、『川島なお美動物愛護基金』でグランプリにあたる「川島なお美賞」を受賞した女優で動物愛護チャリティ団体『Tier LOVE』代表の浅田美代子さんの弁。私も心からそう思います。保護犬、オススメですよ。



放送作家／コラムニスト

山田 美保子